SURE 静岡大学学術リポジトリ
Shizuoka University REpository

『ヴェリスラフ聖書』の図像読解と高校世界史教材化の試み

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 静岡大学人文社会科学部 公開日: 2018-02-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 藤井, 真生, 杉田, 望, 毛利, 舞香, 小林, 実央 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00024542

『ヴェリスラフ聖書』の図像読解と高校世界史教材化の試み

藤井真生・杉田望[1]
毛利舞香[2]・小林実央[3]

はじめに

本稿は14世紀中葉のチェコで制作された『ヴェリスラフ聖書Velislavova Bible』の挿絵の解説と、これを用いた高校世界史授業の教材化の試みである。『ザクセンシュピーゲル』[4]をあつかった2015年度の大学院授業[5]に続き、2016年度には豊富な挿絵で知られるこの資料を選択し、1年間かけて取り組んだ[6]。選んだ理由は、日本語訳、つまり聖書が簡単に入手でき[7]、かつデジタル・アーカイヴで挿絵を確認できる（＝受講者がみな手元で図像を確認できる）ためである[8]。

周知のように、新しい学習指導要領では、平成34年度から現行の世界史、日本史、地理（各A, B）に代えて、歴史総合、地理総合、世界史探究、日本史探

---

[1] 静岡大学大学院人文社会科学研究科比較地域文化専攻2年（2016年度当時の学年。以下も同様）。現在、清水国際高校講師。

[2] 静岡大学大学院人文社会科学研究科比較地域文化専攻1年。

[3] 静岡大学人文社会科学部社会学科人間学コース4年。

[4] 13世紀ドイツで作成された法書。現在、4種の彩飾写本が伝えられている。ここではハイデルベルク大学図書館所蔵のハイデルベルク版（http://digi.ub.uni-heidelberg.de/diglit/cpg164）を使用した。

[5] 藤井真生・嶋岡祐太・杉田望「史料紹介と教材化：『ザクセンシュピーゲル』の図像読解と世界史教材化の試み」『静岡大学人文論集』66巻2号（2016）、35-63頁、藤井真生・嶋岡祐太・杉田望・井上まな・小林実央「史料紹介と教材化：『ザクセンシュピーゲル』の図像読解と世界史教材化の試み2」『静岡大学人文論集』67巻1号（2016）、41-64頁。

[6] 他に、井上まな（社会学科歴史学コース4年生）、そして前期のみ山梨夏水（言語文化学科3年生）が参加した。選択する挿絵の検討は参加者全員でおこなった。

[7] ただし、「アンチキリスト・サイクル」のような、現在の正典以外の内容も含む。

[8] チェコ国立図書館のManuscriptorum所蔵（http://v2.manuscriptorium.com/apps/main/index.php?request=request_document&docId=set03112148&client）。なお、2007年にチェコのArcha90社が、300部のファクシミリ版を製作している。国内の図書館で所蔵は確認できないが、海外の図書館からは貸借可能である。

究、地理探究が教えられることになる[9]。内容が細部まで詰められるのはこれからとしても、世界史と日本史を融合した「歴史総合」は、おもに現代社会の問題を理解するのに資するものとして、近現代中心となることがイメージされている。一方、「世界史探究」では、諸資料を活用し、広い時間軸と空間軸のなかで考察することが求められている[10]。ここでいう「諸資料」のなかには、当然、図像資料も含まれてくる。その活用が求められるということは、高校教師の側も諸資料を博捜し、工夫しなければならないということを意味する。2017年度の日本西洋史学会大会において、歴史教育に関して積極的に発言されている小川幸司氏が、既存の資料集はすでに加工済であり、教師側としてはキャプションのない資料が必要であることを述べられた。教師自身の問いかけに即して、教材を作り上げていく余地が残されるべきだと理解できる。しかし、文字資料の翻訳量[11]に比して、図像資料の解説本の出版状況はどうであろうか[12]。まだ十

---

[9] 「学習指導要領改訂の動向について」(http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/002/siryo/__icsFiles/afieldfile/2016/08/01/1374211_05.pdf)。

[10] 「高等学校学習指導要領における世界史科目の改訂の方向性（案）」(http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/062/siryo/__icsFiles/afieldfile/2016/06/20/1371309_11.pdf#search=%27%E4%B8%96%E7%95%8C%E5%8F%B2%E6%8E%A2%E7%A9%B6%27)。

[11] ヨーロッパ中世史研究会編『西洋中世資料集』東京大学出版会、2000年、歴史学研究会編『世界史史料〈5〉ヨーロッパ世界の成立と膨張——17世紀まで』岩波書店、2007年のような編纂物から、上智大学中世思想研究所の『中世思想原典集成』シリーズ、先述の『ザクセンシュピーゲル』のような法書に関しても、久保正幡・石川武・直居淳訳『ザクセンシュピーゲル・ラント法』創文社、1977年や塙浩『ランゴバルト部族法典　塙浩著作集——西洋法史研究（1）』信山社出版、1992年があり、年代記に関しては、東海大学古典叢書の『トゥールのグレゴリウス　歴史十巻』(兼岩正夫、台幸夫訳）や國本哲男・中条直樹・山口巌訳『ロシア原初年代記』名古屋大学出版会、1987年、谷口幸男訳『デンマーク人の事績』東海大学出版会、1993年、大沢一雄訳『アングロ・サクソン年代記』朝日出版社、2012年、三佐川亮宏訳『ザクセン人の事績』知泉書館、2017年などがある。雑誌上での訳出も多数みられる。都市法研究には多く試訳が付されており、また公会議史料に関しても、たとえば、藤崎衛氏の監修の下、『クリオ』上で次々と訳が発表されている。文学作品も含めれば枚挙に暇がない。

[12] 使い易いものとして、ゲルト・アルトホフ（柳井尚子訳）『中世ヨーロッパ万華鏡①　中世人と権力』八坂書房、2004年、ハンス＝ヴェルナー・ゲッツ（津山拓也訳）『中世ヨーロッパ万華鏡②　中世の聖と俗』八坂書房、2004年、エルンスト・シューベルト（藤代幸一訳）『名もなき中世人の日常』八坂書房、2005年や、フランソワ・イシェ（蔵持二三也訳）『絵解き中世のヨーロッパ』原書房、2003年、ロバート・バートレット（樺山紘一監訳）『図解ヨーロッパ中世文化誌百科（上下）』原書房、2008年、池上俊一『図説騎士の世界』河出書房新社、2012年、河原温・堀越宏一『図説中世ヨーロッパの暮らし』河出書房新社、2015年をあげておく。また、単独資料を扱ったものとしては、鶴島和博『バイユーの綴織を読む』山川出版社、2015年が公刊されている。その他、カラーではないが、V・W・エグバート（藤川徹訳）『中世パリの橋のうえで』啓文社、1995年が『聖ドニ伝』の挿絵を用いて、中世パリの橋の上で繰り広げられた光景を解説している。なお、クラウディア・ブリンカー・フォン・デア・ハイデ（一条麻美子訳）『写本の文化誌』白水社、2017年は、『マネッセ写本』制作の背景を論じているが、図像は紹介されていない。

分に提供されているとは言い難い。

ところが、近年、日本も含めて、各地の図書館は前近代資料、とくに絵画資料のデジタル化が推進している[13]。ヨーロッパでは、先述の『ザクセンシュピーゲル』他、『コンスタンツ公会議年代記』[14]や『マネッセ写本』[15]などを所蔵するドイツのハイデルベルク大学図書館や、『フランス大年代記』[16]他、多数の魅力的な図像資料を公開するフランス国立図書館の電子サイト「ガリカ Gallica」などがあげられよう。こうした波は大国ばかりで生じているのではない。本稿で利用するチェコの国立図書館もまた、中世史料のデジタル・アーカイヴ化事業をすすめている。同図書館がweb上に構築しているManuscriptorum（Digital Library of Written Cultural Heritage）[17]では、聖書の写本を例にとると、9点のラテン語版、15点のチェコ語版を閲覧することができる[18]。『ヴェリスラフ聖書』はそのうちのひとつである。このように資料のデジタル化が進展し、教室でも簡単に手元の端末からアクセスできるようになっている。タブレットを使用した授業の実践は、今後ますます増加すると予想される。ただし、図像自体は見られたとしても、専門的な解説がなければ、研究者ではない高校教師には簡単に利用できるものではないだろう。研究者は歴史教育および社会一般に還元すべき責務がある。一般に利用できる形での図像資料解説の作成もその中に含まれるといえる。そして、そのための膨大な作業が残されているのである[19]。

こうした歴史教育と資料をめぐる近年の状況をふまえて、本稿は、中世ヨー

---

[13] 日本では、たとえば国立国会図書館のデジタルコレクションで、有名な『一遍上人絵伝』などが閲覧できる（http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2591573）。

[14] 1415年のヤン・フス処刑を描く年代記（http://digi.ub.uni-heidelberg.de/diglit/ir00196000/0041/thumbs?sid=6e5f0ebdcaad47ffaec095926e7094ec#/current_page）。近年の教科書はすべて、フス処刑の異なる図版を掲載している。

[15] 14世紀ドイツの歌謡写本。騎士道文化を示す資料としてよく用いられている（http://digi.ub.uni-heidelberg.de/diglit/cpg848）。

[16] 13世紀のフランスで執筆され、その後も書き継がれたフランス王家の正史。いくつかの版が知られている。ここではシャルル5世版を掲載しておく（http://gallica.bnf.fr/ark:/12148/btv1b84472995/f1.planchecontact.r=GRANDES+CHRONIQUES+DE+FRANCE）。

[17] Manucsriptorum（http://www.manuscriptorium.com/）。本プロジェクトに関しては、菊池信彦「デジタル化の「その先」へ：ヨーロッパにおける中世写本のデジタル化の現状とデジタルヒューマニティーズ」『情報の科学と技術』65-4号（2015年）、155-163頁。

[18] その他にもチェコの歴史を記した年代記、市民の仕事道具を多数掲載する聖歌集、中世の自然科学的な知識を結集した科学書など、さまざまなジャンルの写本が収録されている。そのジャンルについては、ヴァーツラフ・フサ編著（藤井真生訳）『中世仕事図絵』八坂書房、2017年、参考文献欄を参照。

[19] 文字史料の翻訳に関しても、これで十分だというわけではない。個々の研究者によるさらなる訳出が期待される一方で、史料翻訳のデータベース化も待ち望まれる。

ロッパ社会の理解に役立つ豊富な挿絵資料を備えた『ヴェリスラフ聖書』の紹介と解説、そしてこれを用いた授業案を提供するものである。3章で紹介されるように、中世ヨーロッパの文化（騎士道や修道院文化、教会建築など）だけでなく、農業や裁判の模様などを数多く含み、ひとつの資料で中世ヨーロッパ社会の全体をカヴァーすることができるためである。以下、1章では資料の紹介（担当：藤井）を、2章では図像の解説（担当：毛利、小林、杉田）、3章では模擬授業案（担当：杉田）を掲載する[20]。

1章、『ヴェリスラフ聖書』について

188葉からなるこの聖書は、最後の頁で聖カタリナの前に跪く聖職者が発注者とみなされている。その人物は、ルクセンブルク朝期に国王ヤン（1310-46）の下で書記として登場し、次代カレル4世（1346-78）時代になると外交官としても活動するようになる、プラハ聖堂参事会員ヴェリスラフである[21]。彼が発注した背景は不明だが、おおよそ1340年頃に、プラハの俗人の工房で制作されたと考えられている[22]。画家の名は伝わっておらず、作画の影響関係は解明されていないが、こうした線描画は、同世紀中に制作された『女子修道院長クンフタの殉教者受難物語Pasionál abatyše Kunhuty』や『挿絵の書Liber depictus』などにもみられる[23]。また、ゴシック時代の絵画に属するが、描かれている人物の服装にはロマネスク時代の遺風がみてとれる。

画面は基本的に赤い線で大枠が示されており、各頁は上下に二分割されている（89rや98r, 111vなどのように、例外的に全頁で構成されている画もある）。まず線描し、次いで最大3行ほどの字句が書き込まれ、最後に水彩が施されたと考えられている。色は赤や緑が多いが、青や黄色系統も使われている。この聖書は、テキスト理解のために挿絵が付されているわけではなく、むしろ文字が場面理解の一助として書き込まれている。同時代の聖書がさほど多く伝来し

---

[20] この模擬授業は、静岡大学人文社会科学部の歴史学コースが主催している地歴教員養成講座（地域連携応援プロジェクト採用）の2017年度第4回目に実施されたものである。本講座の活動内容については、コースHPを参照されたい（http://www.hss.shizuoka.ac.jp/shakai/history/）。

[21] K. Stejskal, P. Voit, *Illuminované rukopisy doby husitské,* Praha, 1991, p. 38.

[22] 以下、チェコ国立図書館Maniscriptorumに掲載されている情報を参照（註8）。

[23] 前者は、プラハ城内にある聖イジー女子修道院の院長クンフタ（プシェミスル・オタカル2世の長女）が1310年代に制作させたもの。26枚の水彩画を含む。後者は、この時代の大貴族ロジュンベルク家が本拠とするチェスキー・クルムロフのフランシスコ会修道院で制作されたもの。着色はされていない。

ているわけではないため、断定することはできないが、チェコ国立図書館所蔵のManuscriptorumで公開されている聖書には、このように図像メインのものは他に見当たらない。

内容は、「創世記」(1r-52v) に始まって、「出エジプト記」(53r-88v)、「ダニエル書」(89r-108r)、「士師記」(108v-115r)、「ユディト記」(115v-130r)、「アンチキリスト・サイクル」(130v-135v)、「キリスト・サイクル」(136r-149r) と続き、書物と関係なく聖人が描かれる数葉をはさんで、「ヨハネの黙示録」(153r-168v)、「使徒行伝」(169r-179v)、「聖ルドミラと聖ヴァーツラフ伝」(180r-188r) で終わりを迎える。チェコの守護聖人2人（祖母と孫）を描いた最後の聖人伝は、この聖書がチェコで生み出されたものであることをこの上なく物語っている。

豊富な挿絵からは、当時の農耕や牧畜、狩猟、建築、軍隊や宴会の様子をうかがうことができ、中世社会を理解するための重要な資料となっている[24]。また、有名な聖書の場面を、当時の画家がどのように描き表したのか、どのような決まりごとの上に表現しているのかも看取できる。そうした点をふまえて、2章では道具、動物、身なり／身ぶりに着目した。その解説は次章に譲るとして、以下では『ヴェリスラフ聖書』に描かれた場面の内容を1頁ごとに示しておく。ただし、残念ながら紙幅の関係で「創世記」のみとする。

Folio	場面内容	章／節	Folio	場面内容	章／節
1r上	世界の創造、1日目	1/1-5	1r下	世界の創造、1日目	1/1-5
1v上	世界の創造、2日目	1/6-13	1v下	世界の創造、3日目	1/6-13
2r上	世界の創造、4日目	1/14-23	2r下	世界の創造、5日目	1/14-23
2v上	世界の創造、6日目	1/24-31	2v下	楽園（アダムの誕生）	2/1-14
3r上	禁断の果実	2/15-17	3r下	エヴァの創造	2/21-22
3v上	アダムとエヴァの結婚	2/23-25	3v下	蛇の誘惑	3/1-6
4r上	果実摂取と羞恥の開始	3/6-8	4r下	違反の確認	3/9-13
4v上	原罪	3/13-24	4v下	楽園追放	3/13-24
5r上	楽園を守護する天使	3/25	5r下	エリヤとエノク	※
5v上	耕すアダム、紡ぐエヴァ	4	5v下	種を蒔くアダムと息子たち	4
6r上	牧人アベルと農夫カイン	4/2	6r下	神への奉献とアベルの殺害	4/3-8
6v上	カインの罪の認知	4/9-16	6v下	カインの都市建設	4/17
7r上	エノクの子孫	4/18-21	7r下	同左	4/18-21

[24] 歴史資料としての写本挿絵については、堀越宏一「中世ヨーロッパの写本挿絵における時代表現と写実性」甚野尚志・益田朋幸編『ヨーロッパ中世の時間意識』知泉書館、2012年、337-358頁。

7v上	トバル・カイン	4/22	7v下	レメクの認知	4/23-24
8r上	アダムの子孫	4/25-26	8r下	同左	5/1-17
8v上	イエレドの子孫	5/18-32	8v下	同左	5/18-32
9r上	人類の増加	6/1-21	9r下	方舟建造に関する神の指示	6/1-21
9v上	ノアの方舟建造	7	9v下	洪水、方舟から放たれた鳩	8/1-12
10r上	ノアが焼く生贄	8/20-22	10r下	祝福されるノアと息子たち	9/1
10v上	ブドウを植えるノア	9/20	10v下	酔って眠るノアと息子たち	9/21-23
11r上	カナンを呪うノア	9/24-26	11r下	ノアの子孫	10, 11/1-3
11v上	バビロンの塔の建設	11/4-9	11v下	同左	11/4-9
12r上	セムの子孫	11/10-32	12r下	国を出るアブラハム、サラ、ロト	12/1-4
12v上	カナンの地にきたアブラハム、祭壇の建造	12/5-8	12v下	神への呼びかけ	12/5-8
13r上	エジプトへ出発するアブラハムとサラ	12/10-15	13r下	ファラオの宮殿に連行されるサラ	12/10-15
13v上	エジプトから追放されるアブラハムとサラ	12/17-20	13v下	神に呼びかけるアブラハム	13/1-4
14r上	ロトの家畜	13/6-12	14r下	アブラハムの牧人とロトの牧人の争い	13/6-12
14v上	カナンを与えられたアブラハム、祭壇の建造・	13/14-18	14v下	シディムの戦い	14/8-12
15r上	ロトの捕獲を聞き知るアブラハム	14/14-16	15r下	アブラハムの勝利	14/14-16
15v上	アブラハムを祝福するメルキゼデク	14/18-20	15v下	アブラハムに子孫の繁栄を約束する神	15/1-5
16r上	神に奉献するアブラハム	15/9-12	16r下	野鳥の番	15/9-12
16v上	女奴隷を与えるサラ、イシュマエルの誕生	16	16v下	立ち去るハガル、帰還を命じる天使	16
17r上	神とアブラハムの契約	17	17r下	イサクの誕生の告知	17
17v上	3人のアブラハム訪問	18/1-7	17v下	アブラハムの歓待準備	18/1-7
18r上	3人の歓待	18/8-23	18r下	ソドム維持を願うアブラハム	18/8-23
18v上	ソドムに来た天使	19/1-3	18v下	天使を歓待するロト	19/1-3
19r上	天使を囲むソドム人	19/4-15	19r下	天使のソドム人殺害	19/4-15
19v上	ロトを連れ出す天使	19/16-29	19v下	ソドムの滅亡	19/16-29
20r上	父を酔わすトロの娘、ベン・アミの誕生	19/31-38	20r下	モアブの誕生、ゲラル滞在	20/1-2
20v上	サラを召し出すアビメレク	12	20v下	アブラハムの子供	16, 21/1-13
21r上	ハガルとイシュマエルの追放、水の祈り	21/14-20	21r下	射手となるイシュマエル	21/14-20

21v上	イシュマエルの結婚、アブラハムとアビメレクの契約	21/21-34	21v下	ぎょりゅうを植え、神を呼ぶアブラハム	21/21-34
22r上	イサクの生贄の指示	22/1-5	22r下	同左	22/1-5
22v上	イサクの犠牲	22/6-13	22v下	羊の犠牲	22/6-13
23r上	アブラハムの帰還、ナホルの子孫	22/16-24	23r下	サラの死	23/1-4
23v上	マクペラ洞穴の購入	23/5-20	23v下	イサクの嫁さがし	24/1-10
24r上	リベカと召使、贈り物	24/11-24	24r下	ラバンの出迎え	24/11-25
24v上	召使とラバン、ベトエル	24/25-67	24v下	リベカとイサクの結婚	24/25-67
25r上	イサクとリベカの出立	26/1-10	25r下	アビメレクとの対話	26/1-10
25v上	種を蒔くイサク	26/11-16	25v下	アビメレクの出立命令	26/11-16
26r上	アブラハムの子孫	25/1-9	26r下	アブラハムの埋葬	25/1-9
26v上	イサクの願い	25/21-34	26v下	エサウとヤコブ	25/21-34
27r上	ゲラルの井戸掘り	26/18-25	27r下	イサクの祈り	26/18-25
27v上	エサウに食事を求めるイサク	27/1-16	27v下	ヤコブに助言するリベカ	27/1-16
28r上	父に食事を用意するヤコブ	27/17-30	28r下	鹿を射て調理するエサウ	27/17-30
28v上	父に食事をもってきたエサウ	27/31-46	28v下	ラバンのもとへ旅立つヤコブ	28/1-2
29r上	ヤコブの夢	28/12-22	29r下	同左	28/12-22
29v上	ヤコブとラケル	29/1-14	29v下	ヤコブとラバン	29/1-14
30r上	レアを与えるラバン	29/15-32	30r下	ラケルを与えるラバン、ヤコブの息子ルベン	29/15-32
30v上	ヤコブとレアの子供	29/33-35	30v下	ラケルの願い	30/1-4
31r上	ヤコブの子供	30/16-24	31r下	同左	30/16-24
31v上	ヤコブとラバンの群分	20/25-43	31v下	妻たちと話すヤコブ	31/1-5
32r上	カナンへ帰るヤコブ	31/17-23	32r下	ヤコブを追うラバン	31/17-23
32v上	ラバンとヤコブの会話	31/24-46	32v下	ラバンとヤコブの和解	31/24-46
33r上	契約の石塚、娘を祝福するラバン	31/47-54	33r下	天使と会うヤコブ	32/1-3
33v上	使者の派遣	32/4-9	33v下	エサウと使者	32/4-9
34r上	ヤコブの贈り物	32/10-22	34r下	同左	32/10-22
34v上	神と戦うヤコブ	32/23-33	34v下	エサウとヤコブの和解	33/1-5
35r上	土地の購入、ディナ	33/18-20	35r下	ディナとシケム、ヤコブとハモル	34/1-19
35v上	契約の通知	34/20-28	35v下	ハモルとシケムの殺害	34/20-28
36r上	捕虜を連行するシメオンとレビ	34/29-31	36r下	息子と話すヤコブ、神に呼ばれるヤコブ	35/1
36v上	ヤコブの誓約	35/2-8	36v下	デボラの死	35/2-8
37r上	柱の聖別、ラケルの出産	35/9-20	37r下	ラケルの死	35/9-20

37v上	イサクの死	35/22-29	37v下	ヤコブの息子たち	37/1-4
38r上	ヨセフの夢	37/5-10	38r下	同左	37/5-10
38v上	ヨセフの派遣	37/12-23	38v下	ヨセフの殺害計画	37/12-23
39r上	ヨセフを嵌める兄弟	37/24-28	39r下	売られたヨセフ	37/24-28
39v上	ヨセフの衣服	37/29-35	39v下	ヤコブをだます息子	37/29-35
40r上	ユダの結婚	38/1-6	40r下	エルとタマルの結婚	38/1-6
40v上	エルとオナンの死	38/7-13	40v下	使者を迎えるタマル	38/7-13
41r上	ペレツとゼラの出産	38/27-30	41r下	ヨセフを購入するポティファル	39/1
41v上	ヨセフの奉仕、妻の誘惑	39/6-18	41v下	主人の妻の中傷	39/6-18
42r上	ヨセフの投獄	39/20-23	42r下	ヨセフの夢解き	40
42v上	ファラオの夢	41/1-37	42v下	ヨセフの夢解き	41/1-37
43r上	ヨセフの巡行	41/38-44	43r下	同左	41/38-44
43v上	ヨセフの結婚	41/45-53	43v下	飢饉への備え	41/45-53
44r上	民衆の訴え	41/54-57	44r下	食糧の売却	41/54-57
44v上	息子を派遣するヤコブ	42/1-11	44v下	ヨセフに面会する兄弟	42/1-11
45r上	兄弟の投獄	42/17-26	45r下	兄弟の解放	42/17-26
45v上	穀物袋の中の銀	42/27-38	45v下	エジプトへ連行される末弟	43/1-11
46r上	ヨセフと兄弟たち	43/15-23	46r下	シメオンの解放	43/15-23
46v上	部屋で泣くヨセフ	43/26-34	46v下	兄弟の食事	43/26-34
47r上	杯の混入	44/1-5	47r下	兄弟たちの出発	44/1-5
47v上	窃盗の疑い	44/6-34	47v下	正体の告白	45/1-5
48r上	ヨセフの贈り物	45/6-22	48r下	同左	45/6-22
48v上	エジプトからの帰還	45/23-28	48v下	ヨセフの奉献	46/1-4
49r上	エジプトへの出発	46/5-30	49r下	ヤコブとヨセフの再会	46/5-30
49v上	エジプト移住の許可	47/7-12	49v下	家族への給付	47/7-12
50r上	人びとの訴え	47/13-17	50r下	家畜と穀物の交換	47/13-17
50v上	土地の購入	47/18-31	50v下	ヤコブの願い	47/18-31
51r上	エフライムとマナセの祝福	48/10-19	51r下	息子たちを祝福するヤコブ	49
51v上	ヤコブの死	50/1-6	51v下	埋葬許可の申請	50/1-6
52r上	ヤコブの移送	50/7-13	52r下	ヤコブの埋葬	50/7-13
52v上	兄弟の謝罪	50/14-26	52v下	ヨセフの埋葬	50/14-26

Folio（葉）番号、r（表）、v（裏）、画面の上下の順に記してある。以下の番号も同じ。
章節の区切りや固有名詞の表記は、新共同訳の2004年版に準拠している。
アブラムは17章で神に改名されアブラハムと名乗るが、ここでは表記を後者に統一した。

２章、図像解説

【道具編】

以下では『ヴェリスラフ聖書』の図像のうち、生業に関連する道具に関するものを項目ごとに取り上げ、可能なものについては同時代の日本の道具との比較を試みる。

（１）農耕・牧畜・狩猟

まず、畝立て・整地に関連する道具（①）として、スコップ、レーキ（整地用熊手）が挙げられる。スコップの刃先は一部金属が用いられている[25]。これらは主に畑作や井戸掘りの場面で登場するが、レーキに関しては「アンチキリスト・サイクル」の焚書の場面でも登場する（135r）。この場合は、農具とは異なる使われ方である可能性が推定される。続いて、種蒔きに関する道具（②）としては、かごや袋がある。これらは運搬用の道具としても用いられるが、農業を行う場面で登場する場合は、種蒔きに伴う道具とみなした。収穫に使用される道具として、麦などの収穫に用いられる曲がり刃の刈り鎌（sickle）（③-1）、編みかご、葡萄など果樹の収穫に用いられるナイフ（③-2）、主に草の刈り取りに用いられる大鎌（scythe）（③-3）、自在鉤などがみられ、収穫の対象物によって使用する道具が異なったことが確認できる。また、収穫作業と関連して、穀物の脱穀と木の伐採についても触れる。脱穀具としては、唐竿（flail）（③-4）が用いられている。この道具は、長い竿の先端に回転する短い棒を取り付けたもので、穀物に叩きつけることで脱穀を行った。木の伐採には斧が用いられた（③-5）。日本の農具については、鋤・鍬・犂が基本であったとされる[26]。平安時代末期から鉄製品について、特権的な取引がされるようになったが、中世に入っても依然高価であり、鉄製農具も貴重品だった[27]。また、鎌については聖書中の大鎌と同様に、草刈りに特化した鎌が見受けられる。『七十一番職人歌合』の「草苅」にみえる鎌は、刃が長く、先がとがっているという特徴がある[28]。脱穀

[25] 鉄の生産は12世紀にはヨーロッパに拡大し、13世紀までに農村で営業する鍛冶屋が農機具の刃や斧、のこぎりなどの鉄器具を供給するようになった。堀越宏一『中世ヨーロッパの農村世界』山川出版社、1997年、43頁。

[26] 鎌倉期の農具は、『庭訓往来』『今昔物語』によると鋤・鍬・犂が基本であった。木村茂光編『日本農業史』吉川弘文館、2010年。

[27] 窪田蔵郎『鉄から読む日本の歴史』講談社学術文庫、2003年。

[28] 鎌倉期（13世紀ごろ）から草苅を生業とする人々の給免田の集合体である「草苅散所」が史料中に見えることから、専業の職人が使用していたことがうかがえる。盛本昌広『草と木が語る日本

具の中世の様相については明らかではないが、近世前期には扱き箸と呼ばれる、２本の竹の棒で穂を挟み、籾を扱き落とす道具が用いられた[29]。

貯蔵に関する道具では主に穀物の貯蔵に関するものを取り上げる。まず、さすまたのような二股の農具で穀倉に収穫した穀物を束ごと収納する様子（④-1）が描かれる。その他には、鍵付きの長櫃（④-2）や袋（④-3）に脱穀した後の籾を貯蔵する場面が挙げられる。

牧畜に関する道具については牧人の持ち物としての角笛や杖（⑤-1）、家畜に伴う道具としての鞭、水飲み台（⑤-2）が挙げられる。牧人の持つ杖は先端のどちらかが丸くなる形態である。また、牧人の持つ杖や鞭は、戦闘の場面で武器としての利用も確認できる。その他に、家畜の水やりの場面で井戸（⑤-3）が描かれる場合もある。狩猟に関する道具（⑥）としては弓矢が挙げられる。形態は戦闘場面で用いられているものと同一である。

日本では、牧畜や狩猟に特化した道具はあまりみられない。絵巻物に登場する馬子や牛飼いの持ち物として、鞭が描かれる場合がある程度であり、狩猟に関しては戦闘に用いられる武器と同一のものが用いられる場合が多い。

（２）手工業・土木

紡績に用いられる道具（⑦）として、糸巻き棒（distaff）、紡錘車（spindle）が挙げられる。これらは古くから用いられた道具[30]で、左手に糸巻き棒を持ち繊維の束を巻きつけておき、右手で繊維をつまみ、縒りをかけながら糸を引き出し、ある程度の長さになったら糸を紡錘の上部に結び付け、紡錘をつり下げると重みで繊維が少しずつ引き出され、回転によって縒りがかかるという仕組みである[31]。糸紡ぎは世俗の女性の一般的な労働の象徴としても用いられた[32]。鍛冶に関する道具（⑧）として、ハンマー、金床、ふいごが挙げられる。日本でも『東北院職人歌合絵』などにおおむね同様の道具が描かれるが、ハンマー

の中世』岩波書店、2012年。

[29] 秋山高志・北見俊夫・前村松夫・若尾俊平編『図録 農民生活史事典』柏書房、1991年、90頁。

[30] 13世紀末には紡ぎ車がヨーロッパに登場するが、1280年代に織物商ギルドによる禁止令が出されたり、1340年頃のブリュージュの『工芸の書』の中に「紡ぎ手は……紡ぎ車で横糸を紡ぐよりも糸巻き棒で縦糸を紡ぐほうが多く稼げる」との一節が見えたりすることから、急速に普及したものではなかったと考えられる。J.ギース／F.ギース（栗原泉訳）『大聖堂・製鉄・水車 中世ヨーロッパのテクノロジー』講談社学術文庫、2012年、228-229頁。

[31] J.ギース／F.ギース前掲書、75-76頁。

[32] G.ハインツ＝モーア『西洋シンボル事典―キリスト教美術の記号とイメージ―』八坂書房、2003年。

に相当するカナヅチの他に、向う槌（相槌）として大カナヅチも用いられる[33]。建築については、まず高所作業に伴う道具を取り上げる。特徴的なものとして資材運搬に用いる滑車[34]（⑨-1）があるほか、高所作業用の足場（⑨-2）やはしご（⑨-3）が挙げられる。また、建築に直接関わるものではないが、先が二股に分かれた道具（⑨-4）も描かれる。この道具の詳細については不明である。その他ハンマー（⑨-5）やこて（⑨-6）を用いた石の積み上げ、三角ぐわによる土の調整（⑨-7）、長柄の斧による製材（⑨-8）、建物の解体に用いるつるはし（⑨-9）などが挙げられる。

（3）商業・運搬・通信

商業活動に関する道具としては、貨幣（⑩-1）、鍵付きの箱、天秤（⑩-2）が挙げられる。貨幣のやり取りを行う際には、ボウル状の器や袋などに貨幣を入れて取引が行われる例がある。運搬に用いる道具としては、袋（⑪-1）、杖（⑪-2）、かご（⑪-3）、馬もしくはロバ（⑪-4）、馬車（⑪-5）、担架、肩掛け鞄状の袋（⑪-6）が挙げられる。袋に縄をかけて背負う方法や杖に荷物をかけて運ぶ方法は、他の絵画資料にもみられる中世の運搬方法であると考えられる。かごや袋は背負うだけでなく、首からかけて運搬する場合もある。通信に関連する道具としては、手紙（⑫-1）、ポシェット状の装身具、書物（⑫-2）、板状のものを掲げる告知（⑫-3）が挙げられる。手紙については、印章が紐で添えられていることが確認できる。

（4）生活動作

水汲みの動作に伴う道具としては、井戸（⑬-1）、つるべ（⑬-2）、巻き上げ式つるべ（⑬-3）、汲んだ水を運搬する水瓶、鍋が挙げられる。つるべについては、鍋や壺に直接縄を括り付けて落とすものと、滑車を用いて縄を巻き上げるものとの２類型が認められた。そのほか、天秤棒を用いた水の運搬（⑬-4）も見受けられる。調理に関する道具としては大釜、自在鉤、調理用の壺が挙げられる。自在鉤を用いて大釜を火にかける場合（⑭-1）と、調理用の壺を直接火にかける場合（⑭-2）の２通りが認められた。その他に、パン焼き用の窯（⑭

[33] 遠藤元男『ヴィジュアル史料日本職人史　第１巻　職人の誕生』雄山閣、1991年、61頁。

[34] 13世紀初めまでには初期の型式の巻き上げ機が建築に用いられ、おそらく13世紀中葉までに大きな踏み車が採用されるようになり、動力を加えるのを簡単にするとともに、重い荷物のつり上げをも容易にした。ジョン・ハーヴェー（森岡敬一郎訳）『中世の職人　II建築の世界』原書房、1986年。

-3）や、小麦粉用の篩（⑭-4）も挙げられる。食事を行う際の道具（⑮）としては、ナイフ、杯、皿や壺などの食器類、パン、水差し、ボウルなどがある。パンについては、食材としての描写のほかに、皿代わりに利用する場面も確認できる。

（5）戦闘

戦闘には騎馬同士で行われる対人戦と、籠城する兵士を攻める攻城戦の2つがある。対人戦に伴う道具（⑯）としては、剣、盾、甲冑、槍、棍棒、戦車（chariot）、鞭、旗、槍斧（halberd）、弓矢、矢筒、クロスボウ（石弓、弩）[35]が挙げられる。このうち、鞭や弓矢については戦闘以外の場面でも登場する。攻城戦に用いられる道具（⑰）については、対人戦でも用いられる剣、槍、弓矢、盾に加えて、城へ乗り込むためのはしご、攻め込んでくる兵士に投げる石、城の壁や塀などを壊すためのつるはしなどが登場する。

（6）娯楽

演奏の場面で登場する楽器は、らっぱや角笛などの管楽器、フィドル（fiddle）[36]と総称される擦弦楽器（⑱-1）、プサルテリウム（psalterium）（⑱-6）[37]、リュート（lute）[38]、竪琴などの撥弦楽器（⑱-2、⑱-4）、管楽器（⑱-3）、ベルや太鼓などの打楽器（⑱-5、⑱-7）という、大きく3つのグループに分けられる。形態から楽器名が推定できないものも多く含まれている。

（担当：毛利）

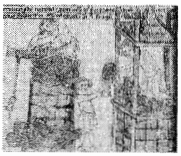
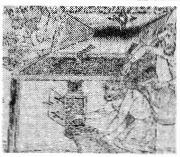
---

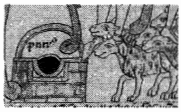
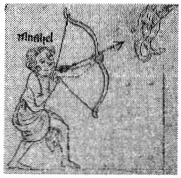
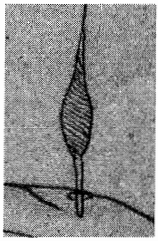
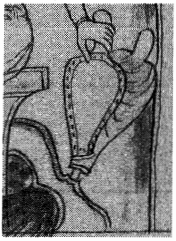
[35] 石弓（クロスボウ）は、11世紀にイタリアで登場した。石弓の基本的な考え方は、弓を弓床（台木）に交差するように取りつければ強く引くことができ、普通の弓よりも銃口速度を伸ばすことが可能になるというものである。この新兵器は教会が懸念を表明したほど強力だった。J.ギース／F.ギース前掲書、191-193頁。

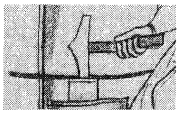
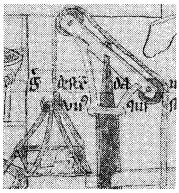
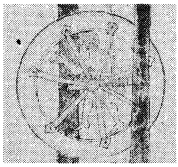
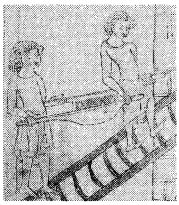
[36] 擦弦楽器を指す中世以来の語。現在、口語的にはヴァイオリンや類似の楽器の通称とされる。形態もある特定なものを指していたわけではないが、通常、中・高音域を受け持つ擦弦楽器を意味していた。下中邦彦編『音楽大事典　第4巻』平凡社、1982年、2061-2062頁。

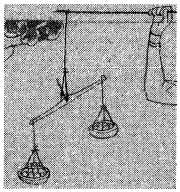
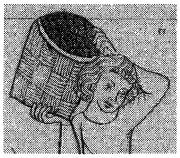
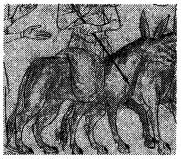
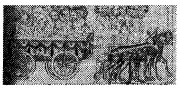
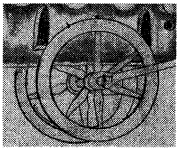
[37] ツィター型撥弦楽器の一種。平たい共鳴箱に響孔があって多数の弦を張る。台形のものが多いが、三角形、翼形のものもある。膝の上においたり、首から紐で吊るしたりすることが多いが、形も構え方もハープに酷似している図像もある。指頭またはプレクトラムでひく。下中邦彦編『音楽大事典　第4巻』、2104頁。

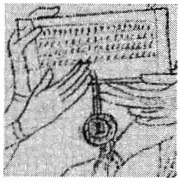
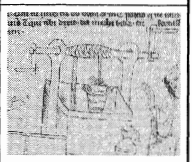
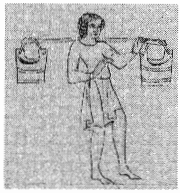
[38] 15～17世紀を中心にヨーロッパで盛行した東方起源の撥弦楽器の名。ラウテなどともいい、語原的にはイスラム圏の楽器名ウードに由来する。また今日では楽器分類法の用語として弦鳴楽器のタイプを表すためにも用いられ、その場合は、全世界の非常に多くの楽器がここに含まれる。下中邦彦編『音楽大事典　第5巻』平凡社、1983年、2738頁。

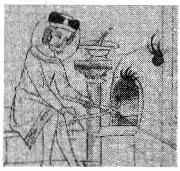
対象・特徴・番号	図像	対象・特徴・番号	図像
①-1 畝立て・整地 特徴：スコップによる耕運。 5v上, 10v上他		①-2 畝立て・整地 特徴：レーキを用いた整地。 53v下, 135r下	
② 種蒔き 特徴：首から下げた袋またはかごに種を入れている。 5v下, 25v上		③-1 収穫 特徴：曲がり刃の鎌による穀物の収穫。 6r上	
③-2 収穫 特徴：自在鉤でかごを吊り下げてナイフで果樹を収穫する。 10v上		③-3 収穫 特徴：大鎌による果樹の収穫。 164v上	
③-4 収穫 特徴：唐竿による穀物の脱穀。 183v下		③-5 収穫 特徴：斧を用いた木の伐採。 22r下	
④-1 貯蔵 特徴：穀物を束ねて倉庫に貯蔵する。 43v		④-2 貯蔵 特徴：錠前付きの長櫃に穀物を貯蔵する。 44r下	

④-3 貯蔵 特徴：袋に穀物を貯蔵する。 45v		⑤-1 牧畜 特徴：杖と角笛を持ち家畜の前に立つ牧人。 6r上	
⑤-2 牧畜 特徴：鞭を持ちラクダを連れた家人と家畜用の水盤。 24r上		⑤-3 牧畜 特徴：井戸端で家畜に水やりをする。 29v上	
⑥ 狩猟 特徴：兎を弓矢で狩る。 21r下		⑦ 紡績 特徴：紡錘車で糸を紡ぐ。 5v上	
⑦ 紡績（同前） 特徴：繊維が束ねられた糸巻き棒。 5v上		⑦ 紡績（同前） 特徴：縒りをかけた糸が巻き付けられた紡錘車。 5v上	
⑧ 鍛冶 特徴:腰かけてハンマーを持ってふいごを操作する人物。 7v上		⑧ 鍛冶（同前） 特徴：空気を送り込むふいご。 7v上	

⑧ 鍛冶（同前） 特徴：金属を打つハンマー。 7v上		⑨-1 建築 特徴：資材を運搬する滑車。 11v	
⑨-1 建築（同前） 特徴：資材を運搬する滑車。 11v		⑨-1 建築（同前） 特徴：踏み車を回転させる人物。 11v	
⑨-2 建築 特徴：高所作業用の足場。 54v下		⑨-3 建築 特徴：はしごを登って資材を運ぶ。 11v	
⑨-4 建築 特徴：さすまた状の道具。 11v		⑨-5 建築 特徴：ハンマーを用いた石の積み上げ。 11v	
⑨-6 建築 特徴：こてを用いた石の積み上げ。 135v下		⑨-7 建築 特徴：三角ぐわによるモルタルの調整。 135v下	

⑨-8 建築 特徴：斧による製材。 54v下		⑨-9 建築 特徴：つるはしを用いた取り壊し。 135v上	
⑩-1 商業 特徴：ボウル状の器に貨幣を入れて売買を行う。 39r下		⑩-2 商業 特徴：天秤による計量。 156r上	
⑪-1 運搬 特徴：荷物に縄をかけて背負う。 22r上		⑪-2 運搬 特徴：杖に荷物をかけて運ぶ。 68v下	
⑪-3 運搬 特徴：かごを用いた運搬。 10v上		⑪-4 運搬 特徴：馬もしくはロバの背に荷物を乗せて運ぶ。 47r下	
⑪-5 運搬 特徴：馬車での移動。 49r上		⑪-5 運搬（同前） 特徴：馬車の車輪。 49r上	

⑪-6 運搬 特徴：肩掛け鞄状の袋。 125r下		⑫-1 通信 特徴：印章を紐で取り付けた手紙。 33r下	
⑫-1 通信 特徴：印章を着けた書簡。 81v上		⑫-2 通信 特徴：書物で言葉を指し示す。 83r上他	
⑫-3 通信 特徴：告知を掲げる。 37r下		⑬-1 水汲み 特徴：スコップによる井戸掘り。 27r上	
⑬-2 水汲み 特徴：鍋に縄を括り付けて直接水を汲む。 21r下		⑬-3 水汲み 特徴：機械を用いた巻き上げ式のつるべ。 141v	
⑬-4 水汲み 特徴：天秤棒による水の運搬。 184r上		⑭-1 調理 特徴：自在鉤に大釜を掛けて調理を行う。 17v下, 26v下	

⑭-2 調理 特徴：鍋を用いた調理。 26v下		⑭-3 調理 特徴：小麦粉篩い。 184r下	
⑭-4 調理 特徴：窯でのパン焼き。 184r下		⑮ 食事 特徴：様々な食器とナイフが使われている。 18v下他	
⑮ 食事（同前） 特徴：杯とナイフ、皿代わりのパン。 18v下他		⑯-1 対人戦 特徴：騎馬同士が剣や盾で戦う。 115v他	
⑯-2 対人戦 特徴：騎馬で戦車を引く。 70v上他		⑰-1 攻城戦 特徴：はしごを使って城に攻め込む。 118r他	
⑰-2 攻城戦 特徴：籠城して石を投げ落とす。 118r他		⑰-3 攻城戦 特徴：クロスボウ（石弓）を撃つ準備をする。 118r他	

⑰-4 攻城戦 特徴：籠城して弓を撃つ。 118r他		⑱-1 演奏 特徴：擦弦楽器の演奏。 72r上他	
⑱-2 演奏 特徴：撥弦楽器の演奏。 72r上他		⑱-3 演奏 特徴：管楽器の演奏。 95r他	
⑱-4 演奏 特徴：弦楽器の演奏。 129r下他		⑱-5 演奏 特徴：ベルに似た打楽器の演奏。 129下r	
⑱-6 演奏 特徴：プサルテリウムの演奏。 129r下他		⑱-7 演奏 特徴：太鼓の演奏。 140r上他	

【動物編】

以下では、『ヴェリスラフ聖書』の図像のうち、動物に関連する項目を取り上げる。

まず、四足歩行をする動物について記述する。神が創造した生き物として、シカ（①）、ハリネズミ（⑦）、ウマ（③）、ライオン（⑫）、ヒツジ（④）、リス（⑭）、ラクダ（②）、サル（⑮）、オオカミ（⑨）、ブタ（⑧）、ウシ（⑤）が登

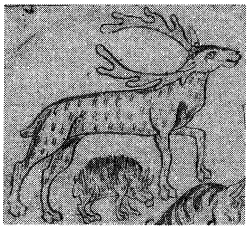
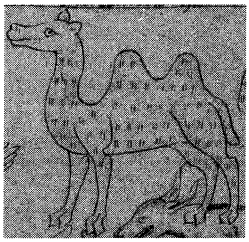
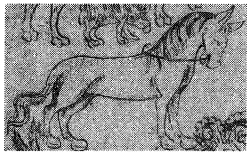
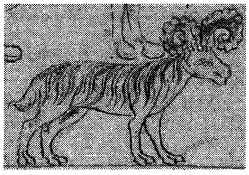
場している。そのうち、子ウシは調理される動物としても登場し、子ヤギやヒツジは神への捧げものとしても描かれている。ラクダ、ウシ、ヤギ、ヒツジは家畜として多数登場する。ウマは、戦闘場面で人を乗せ、また荷物を運ぶ動物として表現される。人を乗せて移動するための動物としては、他にロバ（⑥）が登場する。ウサギ（⑬）、キツネ（⑩）、イヌ（⑪）の描写もある。

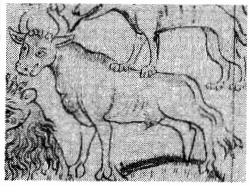
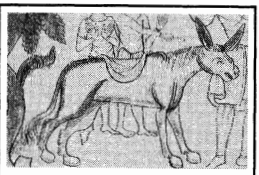
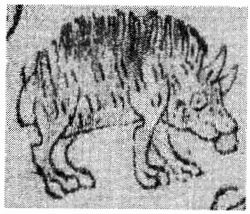
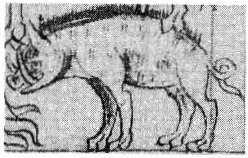
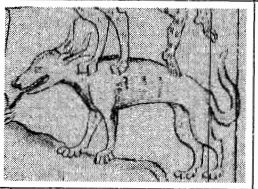
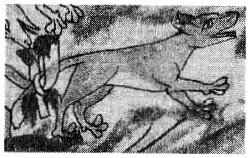
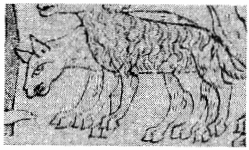
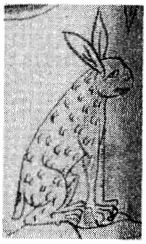
続いて、鳥の描写に触れていく。神が創造した翼のあるすべての鳥として、ニワトリ（⑯）クジャク（⑰）、ツル（⑱）、フクロウ（⑲）、アヒル（⑳）、オウム（㉑）、ヤマセミ（㉒）、ハト（㉓）などが描かれている。ただし、これらは種名が明記されているわけではない。ハトは、神の精霊としても登場する。さらに、カラス（㉔）は、溺れている人の死体をつつく様子が、ハゲタカ（㉕）は死体の上に降り立っている様子がそれぞれ表現されている。この他にも、名前が特定できない鳥が登場している。

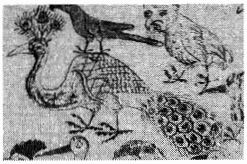
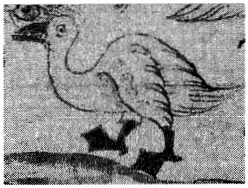
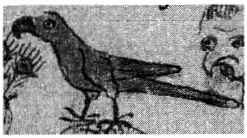
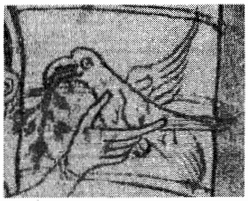
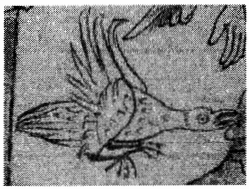
以上は現代知られている一般的なイメージと似た姿で描かれている。これに対して、ヘビ（㉗）は耳が描かれており、一般的なイメージとは異なった姿で描かれている。カエル（㉖）も同様である。さらに、出エジプト記においては虫の描写がある。ブヨ（㉘）、アブ（㉙）、イナゴ（㉚）が描かれている。その姿は実物とはかけ離れており、むしろ鳥に近い。

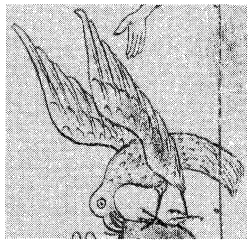
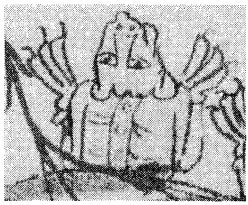
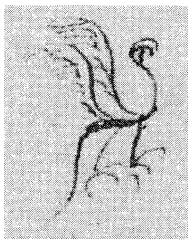
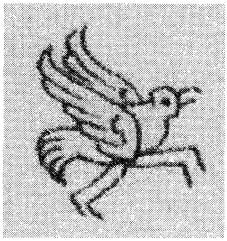
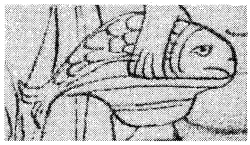
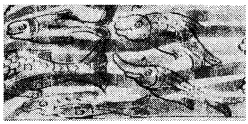
魚（㉜）も登場するが、そのほとんどの名前を推定することは難しい（㉛は食用）。

（担当：小林）

① シカ 2v上		② ラクダ 2v上他	
③ ウマ 2v上他		④ ヒツジ 2v上	

⑤ ウシ 2v上他		⑥ ロバ 22r上下、23r上他	
⑦ ハリネズミ 2v上		⑧ ブタ 2v上	
⑨ オオカミ 2v上		⑩ キツネ 111v上下	
⑪ イヌ 6r上他		⑫ ライオン 2v上他	
⑬ ウサギ 98v下		⑭ リス 2v上	

⑮ サル 2v上		⑯ ニワトリ 2r下	
⑰ クジャク 2r下		⑱ ツル 2r下	
⑲ フクロウ 2r下		⑳ アヒル 2r下	
㉑ オウム 2r下		㉒ ヤマセミ 2r下	
㉓ ハト 1r上、2r下、9v下、他		㉔ カラス 9v下	

㉕ ハゲタカ 16r下		㉖ カエル 61r下、61v下	
㉗ ヘビ 3v下、4v上、他		㉘ ブヨ 62r下	
㉙ アブ 62v下		㉚ イナゴ 64r下、64v下	
㉛ 魚（食卓） 167v下		㉜ 魚（海の生き物） 2r下	

【身なり・身ぶり編】

（1）身なり

以下では、『ヴェリスラフ聖書』の登場人物の身なりについて取り上げる。

まず、聖書には神が最初に登場するが、神（①）は丈の長い衣の上に外套を羽織っており、頭の周りには光輪が描かれている。神の光輪には十字が描かれていることが多いが、抜けている場合もある。神の御使いである天使（②）も、光輪があり丈の長い服装をしている点では神と似ているが、天使には羽が生えており、光輪については神のように十字が描かれることはない。聖人（③）も

神と似た姿で描かれている。ただし、光輪に十字が描かれていたり、光輪自体が抜けていたりすることもある。

聖書に最初に登場する人間であるアダムは、神によって創造されてから知恵の実を口にするまでは、服を着ず裸で描かれている（④-A）。その点はイヴに関しても同様である（⑤-A）。アダムとイヴは、神の命令に背いたことでエデンの園を追放されるが、その際には神から与えられた皮の衣を着用している（④-B、⑤-B）。アダムは、土地を耕す際も皮の衣を着ているが、息子カインとともに種を蒔き土地を耕す場面では、次に取り上げる一般的な男性と同じ服装をしており、帽子も着用している（④-C）。

次は、聖書でも多くの場面に登場する、一般的な男性と女性の身なりについて取り上げる。『ヴェリスラフ聖書』において人々が着ている衣服は、おそらくコットとよばれるものと考えられる。コットは、12世紀末から16世紀までの男女のワンピース形の衣服を指すものであり、13世紀には男女の服飾の主流をなし、筒袖が付き、男物はふくらはぎからくるぶしまでの丈、女物は裾を引く長さをもつ[39]。

一般的な男性の服装は、膝丈のワンピース形の衣服である（⑥-A）。脚に装飾が描かれている場合もある。屋外にいる、あるいは旅に出る男性（⑥-B）を描く際は、一般的な男性の衣服の上に肩掛けマントを着用していたり、杖を持っていたりすることがあるが、必ずしもこの表現で統一されておらず、規則性はなさそうである。男性の中でも身分が高い人物、あるいはその場面において重要な役割を持つ人物（⑥-C）を描く際は、外套を着用している、服や脚に装飾があるなどの特徴がみられ、他の人物と区別されていることがある。しかし、このことについても表現は統一されているわけではない。

女性を描く際の表現の特徴は、ベールの有無にみられる。女性は、ベールを着用している者（⑦-A）としていない者（⑦-B）に分けられるが、前者は既婚女性、後者は未婚女性である。徳井淑子氏によれば、髪は異性誘惑の象徴であり、髪を梳かす行為は異性を誘惑することなのだという。さらに、既婚の女性は被りもので頭髪を覆うことが勧められ、そうであれば貞淑の評判を得た、と説明している[40]。既婚女性がベールを着用した姿で描かれているのは、こうした背景によるものと考えられる。

---

[39] 徳井淑子編訳『中世衣生活誌　日常風景から想像世界まで』勁草書房、2000年、xii（索引／用語解説）。

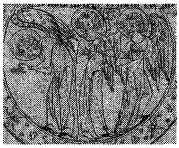
[40] 徳井淑子『服飾の中世』勁草書房、1995年、30頁。

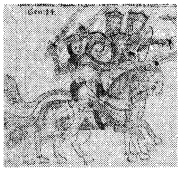
次に、エジプトのファラオについて取り上げるが、ファラオの描写の特徴は、その服装ではなく、彼が座っている玉座にある。ファラオの服装の特徴は、王冠や王笏を所持していることで、彼の服装に関してはどの場面でも同じである。しかし、ファラオの玉座は3種類登場する。円形の玉座（⑧-A）、ライオンのような動物の頭と足を模したX字型の玉座（⑧-B）、台形の玉座（⑧-C）である。3種類の玉座の中で、最も登場頻度が高いのは台形の玉座であった。台形の玉座は、ファラオのみならず、聖人や身分の高い人物の椅子としても登場している。玉座の形状に何らかの象徴的な意味があるのかは不明である。ファラオの関係者としては王妃や王女（⑨）が登場するが、一般的な女性とはデザインが異なる服を着用し、頭には王冠を被っている。

特定の民族に対しての描き分けがみられる場合も確認できる。イスラエル人（⑩）は、服装については一般的な男性のものを着ているが、エジプト人など他の民族が共に描かれる時は、区別のために帽子をかぶった姿で描かれている。

職業を反映して身なりを描いている場合もある。牧人（⑪）は、帽子をかぶり、杖を持った姿で描かれている。戦う人（⑫）については、騎士のように武装しており、鎖帷子や甲冑を身に着け、剣や盾などの武器を所持している。出産の場面で登場する助産婦（⑬）は、頭に布を巻いた姿で描かれているため、他の女性と区別することができる。聖書には魔術師（⑭）も登場するが、葉のような形の被り物を着用し、植物を模した杖を所持するという特徴的な身なりで描かれている。魔術師の他に、占い師、祈祷師、まじない師、賢者（⑮）も登場する。彼らは一般的な登場人物と比較してかなり奇妙な身なりをしており、特徴的な裾の衣服や、様々な色のタイツを身に着け、風変わりな帽子をかぶり、手には蛇を持っている。ただし、このような特徴的な身なりではなく、一般的な男性の身なりで描かれている場面もあった。

その他『ヴェリスラフ聖書』にみられる特徴的な身なりの表現として、死者（⑮）の描写にふれておく。死者は、身体を布で巻かれ、防腐処理を施された状態で棺に横たわった姿で描かれている。

① 神 光輪（十字が描かれていない場合もある）。足首丈の服装、外套。 1r上下、1v上下他多数		② 天使（御使い） 光輪、羽、足首丈の服装。 1v上、16v下、18v上下他多数	
③ 聖人 光輪、足首丈の服装。 5r下、15v上、55v上下他多数		④-A アダム（裸） 2v下、3r上下、3v上下他数か所	
④-B アダム（皮の衣） 神から与えられた皮の衣を着ている。 4v下、5v上		④-C アダム（着衣） 一般的な男性と同じ服装。帽子をかぶっている。 5v下、6r上	
⑤-A イヴ（裸） 3r下、3v上下、4r上下他数か所		⑤-B イヴ（皮の衣） 神から与えられた皮の衣を着ている。 4v下、5v上	
⑥-A 男性 膝丈のワンピース。帽子をかぶっていることもある。 5v下、6r上下他多数		⑥-B 男性 屋外にいる場合、肩かけマントや杖が描かれることもある。 13v下、22r上他多数	

⑥-C 男性 身分が高い人物やその場面の重要人物は外套を羽織っている。あるいは服や脚に装飾がある。 7r上下他多数		⑦-A 女性 足首丈の服。既婚女性はベールを着用している。 6v上下、7r下、7v上下他多数	
⑦-B 女性 足首丈の服。未婚女性はベールを着用していない。 9r上、24r上下、24v上下他多数		⑧-A ファラオ 王冠、王笏を身に付けて、円形の玉座に座っている。 13r下、13v上他数か所	
⑧-B ファラオ ライオンのような動物の頭と足を模したX字型の玉座に座っている。 25r下、53r上		⑧-C ファラオ 一般的な台の形をした玉座に座っている。この形の玉座は聖人や他の身分の高い人物も座る 42v下、44r上他多数	
⑨ ファラオの親族女性 ベール、足首丈の服、王冠。 54r下、54v上、97r下他数か所		⑩ イスラエル人 エジプト人など他民族が共に描かれる時は、区別のためにイスラエル人が帽子をかぶった姿で描かれる。 53r下、53v上、54r上他	
⑪ 牧人 帽子、杖。 14r下、49v上		⑫ 戦う人 鎖帷子、甲冑、剣、盾。 14v下、15r下、32r下他数か所	

⑬ 助産婦 頭に布を巻いた老婆。 37r上、41r上		⑭ 魔術師 杖、葉のような帽子（帽子がない場合もある）。 61r下、62r下	
⑮ 占い師、祈祷師、まじない師、賢者 変わった帽子、蛇を持っている。 92r上、99v下		⑮ 死者 身体を布で巻かれる。防腐処理が施されている。棺に入れられる。 23r下、26r下、36v下他数か所	

（2）身ぶり

以下では、『ヴェリスラフ聖書』の図像にみられる特徴的な身ぶりについて取り上げる。

まず、神が人に祝福を与える（①）という身ぶりは、祝福を与える対象に人差し指と中指をかざすことで表現される。この身ぶりは、神が全身ではなく手のみで描かれている場合も同様である。そして、人が祝福を受ける際は、神に対し頭を下げ、両手を差し出す。

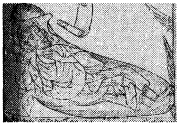
人物の感情を反映した身ぶりとしては、悲しむという行為があげられる（②）。人の死を描いた場面でみられる身ぶりであり、片方の手でもう片方の手を握るというポーズによって、自身の悲しみを表現している。

人々の結婚を描いた場面でも、特徴的な身ぶりがみられる。結婚という状態は、男女が抱き合う行為によって表現されている（③）。第三者による仲介で男女が引き合わされる場面があるが、結婚の仲介（④）は、仲介者が真ん中に立ち、男性と女性の腕を握って２人を引き合わせるという描写が用いられている。また、結婚をする場面、それ以外で人を買い受ける場面では、夫が妻の腕をつかむ、あるいは買う側が買われた側の腕をつかむという行為によって、その人物を所有している状態を示している（⑤）。

最後に、夢を見ている人物の表現について取り上げる（⑥）。夢を見ているこ

との象徴的表現として、頬杖をついて横たわる人物が枠で囲まれている。この枠の外に、人が見ている夢の内容が描かれている。聖書における夢は、意味のないものではなく、多くは神からの啓示である。そのため神による幻視であるとも考えられる。夢や幻視によって神から伝えられるメッセージの内容には、神の好意、忠告、助言、神の威厳の顕示、神の計画や未来の出来事の啓示、不敬な者たちへの罰の啓示、人間が取るべき行動や任務の指示、あるいは神が人間に語る約束、神の祝福等がある[41]。夢を見るという行為の表現は、聖書の図像にみられる身ぶりの中でも宗教的な意味合いが強いといえるだろう。

（担当：杉田）

① 祝福を与える／受ける ２本の指をかざす／頭を下げ、両手を差し出す。 3r下他多数		② 悲しむ 片方の手でもう片方の手を握る。 19v下、21r上、23r下他多数	
③ 結婚 抱き合う。 9r上、20r上下、20v下他多数		④ 結婚の仲介 男女の腕を握り、引き合わせる。 3v上、30r上下	
⑤ 所有 結婚する時、人を買う時に手を掴む。 6v上、40r上下、41r下他数か所		⑥ 夢を見る 頬杖をついて横たわる人が枠で囲まれている。 29r下、38r上下、42v上他数か所	

[41] 壬生正博「異界研究の視点から見る聖書の夢や幻視について」『地域健康文化学論輯』１号（2009年）、13-37頁、15頁。

３章、世界史教案

以下に、第４回地歴教員養成講座（2017年８月10日）で行った模擬授業の配布資料と教案を掲載した。授業の題材は「西ヨーロッパの中世文化」である。中世ヨーロッパという遠く離れた時代をイメージさせるための助けとして、14世紀前半、ルクセンブルク朝ボヘミア王ヨハンおよびカレル１世（神聖ローマ皇帝カール４世）に仕えた宮廷公証人・司祭ヴェリスラフの命で制作された絵解き聖書『ヴェリスラフ聖書』の図像を、授業に取り入れた。

教案を作成するにあたって心がけたことは、第一に、図像を効果的に用いて、生徒に中世ヨーロッパのイメージを持たせること、第二に、生徒の活動の場を取り入れることである。一つ目に関しては、開墾の様子、アルファベットの小文字の活用、騎士の装い、建築現場といった授業の随所で、『ヴェリスラフ聖書』の図像を取り上げ、視覚的な理解の助けとなるようにした。二つ目に関しては、『ヴェリスラフ聖書』の図像と、日本語訳聖書の文章を照合し、図像が文章のどの場面を描いたものかを考えさせるという活動を取り入れた。文章を読むだけでなく、図像と照らし合わせることで、聖書の内容を理解する助けとなり、読む機会があまりないであろう聖書に触れるきっかけになると考えた。

掲載にあたって修正した点もある。講座で模擬授業を行った際、参加者から多くの意見・アドバイスをいただいた。それらをもとに修正した点は、以下のようになる。まず、生徒に配布するプリントに、スライドで見せた図像を掲載したことである。模擬授業では、一部の図像をスライドのみの掲載としていたが、生徒が後で見返すことができた方が良いとの意見をいただき、配布用のプリントにも載せることとした。もう一つは、生徒の活動を評価できるようにすることである。模擬授業では、聖書の読み解きをさせる活動を取り入れていたが、特に書きものをさせたりはせず、評価の方法が教師の観察のみになってしまっていた。そこで、聖書の読み解き以外にも、生徒に意見を書かせる場面を設け、生徒の活動の場を増やすとともに、書きものという形で、評価できるものを残すようにした。

最後に、拙い授業であったにもかかわらず、真摯にアドバイスをくださった大学・高校の先生方、学生の方々に、深く感謝申し上げる。

西ヨーロッパの中世文化

●西ヨーロッパ中世はキリスト教の時代→人々の日常生活に教会の権威がゆきわたる

●学問や芸術などの文化面もキリスト教と関係が深い→キリスト教文化の形成

Ⅰ　学問とキリスト教

特色：神学が最高の学問（「哲学は神学の婢」）

学者・知識人＝聖職者・修道士

知識界の国際的共通語＝ラテン語

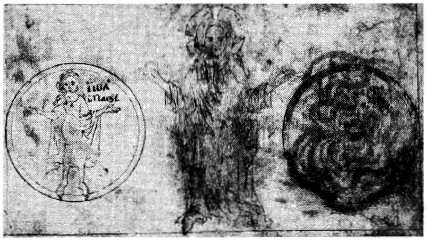
☆聖書の世界をのぞいてみよう

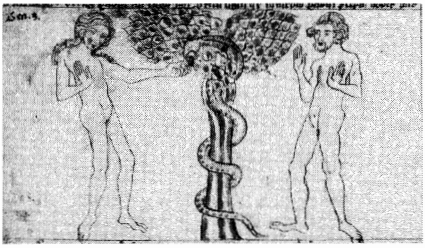
絵解き聖書を使って、中世の知識人が共有していたキリスト教の世界観を知ろう。

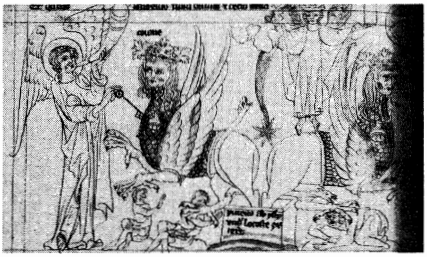
※ヴェリスラフ聖書

14世紀前半、ルクセンブルク朝ボヘミア王ヨハンおよびカレル１世（神聖ローマ皇帝カール４世）に仕えた宮廷公証人・司祭ヴェリスラフの命で製作された絵解き聖書。

何の場面を描いているのだろう？

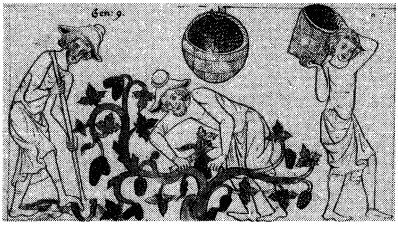






（1）修道院：修道士が共同で修道生活を送る場所

- 中世前期における教育の中心は修道院。
- ベネディクト修道会：清貧・純潔・服従の戒律。「祈り、働け」
- シトー修道会：大開墾時代の先頭に立つ。
- 托鉢修道会：托鉢によって布教を進める。フランシスコ会、ドミニコ会など。



（2）カロリング＝ルネサンス

- カール大帝（在位768～814）の宮廷を中心とする古典文化復興運動
- イギリスの神学者アルクィンなどが宮廷に招かれる
- ラテン語による文芸復興
- アルファベットの小文字の開発

出エジプト記20-15
Non furtum facies.
盗んではならない。

（3）スコラ学の発達（スコラ＝学校）

- 教会の権威の理論的確立のために、信仰の理論的体系化をはかる

→キリスト教の教義の研究、論争を通して真理を探究

- 普遍論争の展開

実在論 （普遍は現実に実体として存在する）	唯名論 （普遍は思考の中に存在するに過ぎない）
アンセルムス（英）	アベラール（仏）

☆自分ならどっちの立場に賛成するだろう？　理由も考えてみよう。

→トマス＝アクィナスによるスコラ学大成。普遍論争の収拾。

- 近代への道

ロジャー＝ベーコン：観察・実験による経験を重視→近代科学への道を開く

ウィリアム＝オブ＝オッカム：唯名論を確立。近代合理主義思想の基礎を築く。

（4）12世紀ルネサンス

- 12世紀を中心に西欧で繰り広げられた文化運動（ギリシア語、アラビア語文献のラテン語への翻訳、法学・科学・哲学の復興、大学の設立など）

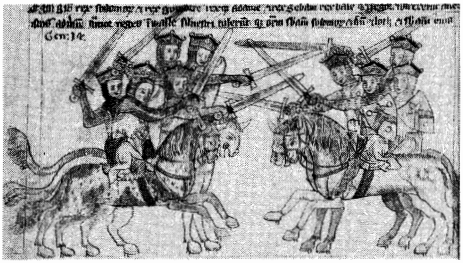
→大学の誕生：商業の復活とともに、教育の中心は都市の大学に移る
教会付属学校を母体に、教授や学生の組合（ギルド）として成立

- 十字軍をきっかけに東方との交流が盛んになり、ビザンツ帝国やイスラーム世界の文化が流入してきたことが背景にある

※中世文学

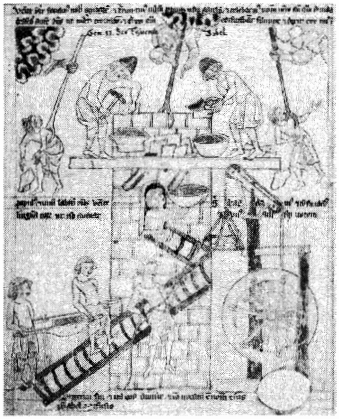
- 口語（俗語）が用いられた
- 騎士道物語に代表される←武勇と主君への忠誠、神への信仰、女性・弱者の保護を重視
- 宮廷では、吟遊詩人によって騎士の恋愛が叙事詩にうたわれた

代表的な文学作品　『ローランの歌』『ニーベルンゲンの歌』『アーサー王物語』



II　美術とキリスト教

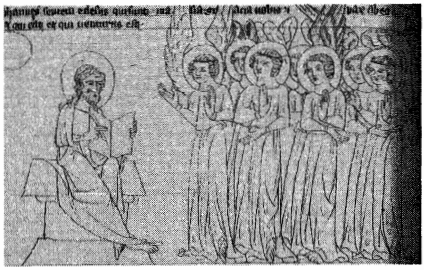
中世の美術は、主に教会建築やその壁画に代表される。

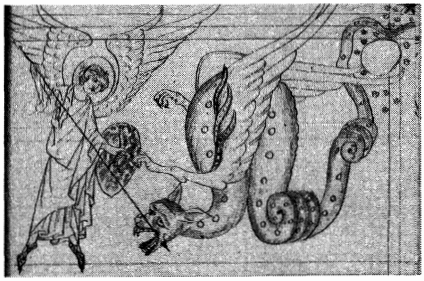


中世の建築場面
ケルン大聖堂（ゴシック様式）の尖塔は約156m。はしごや滑車を利用することで、高い所に資材を運ぶことができた！

バシリカ様式 （4～8世紀、南欧中心）	長方形の身廊と側廊 ローマ時代の公共建築物の流れ	聖マリア＝マジョーレ聖堂（伊）
ビザンツ様式 （4～15世紀、東欧中心）	正十字の平面形と丸屋根 モザイク壁画が特色	聖マルコ大聖堂（伊） 聖ソフィア大聖堂（トルコ）
ロマネスク様式 （11～12世紀、南欧中心）	長十字の平面形にローマ風の半円形アーチ 厚い石壁、小さい窓を持つ	ピサ大聖堂（伊） クリュニー修道院（仏）
ゴシック様式 （13～15世紀、西・北欧中心）	尖塔アーチ、高い天井と尖塔 →神のいる天上を志向 大きな窓とステンドグラス	ケルン大聖堂（独） シャルトル大聖堂（仏） ランス大聖堂（仏）

☆描かれた時期が異なる、同じ題材の絵を比べてみよう。どんな違いがあるだろうか？





地理歴史科（世界史）学習指導案

指導者　杉田　望

1　単元　ヨーロッパ世界の形成と発展　『詳説世界史B』山川出版社、2017年。

2　生徒観

基本的な事柄を理解することができ、授業にも意欲的に取り組むことができるが、複数の歴史的事象を関連付けながら思考することや、考えたことを表現したり発言したりすることを苦手としている。

3　単元の目標

- ヨーロッパが宗教をめぐって東西に分裂し、それぞれが独自の社会のしくみや文化的世界を築いたことを理解する。
- 封建社会が最盛期を迎え、農業生産や人口が増大したことにともなって、西ヨーロッパ世界が内外に拡大したこと、拡大の動きの中でも特に十字軍遠征がその後の西ヨーロッパ世界に大きな影響を与えたことを理解させる。
- 西ヨーロッパ諸国における政治的統一に向けた動きを、後の時代とのつながりを意識しながら理解させる。

4　単元の評価基準

関心・意欲・態度	思考・判断・表現	資料活用の技能	知識・理解
中世ヨーロッパにおける重要な事象や制度等について関心を持つことができる。	中世ヨーロッパの社会や文化等の特色を多面的・多角的に考察できる。	教科書や資料集の資料を読み解き、理解したことや考察したことを説明できる。	中世ヨーロッパ世界の形成・展開について理解することができる。

5　指導計画

第１時　ゲルマン人の大移動
第２時　フランク王国の発展
第３時　ローマ＝カトリック教会の成長
第４時　フランク王国の分裂・外部勢力の侵入
第５時　封建社会の成立と教会

第６時　ビザンツ帝国の盛衰と社会・文化
第７時　スラヴ人と周辺諸民族の自立
第８時　十字軍とその影響
第９時　商業の発展と中世都市
第10時　封建社会の衰退
第11時　教皇権の衰退
第12時　英仏関係と２国間の戦争
第13時　ヨーロッパ諸国の興隆
第14時　西ヨーロッパの中世文化（本時）

６　本時の指導

（１）本時の目標

- 西ヨーロッパ中世世界ではキリスト教が権威を持っており、文化的側面ともかかわりが深かったことを学ぶとともに、史料の読み解きを通して中世の人々の知的世界への理解を深める。(関心・意欲・態度)(資料活用の技能)
- 中世ヨーロッパの文化について、自分の意見をまとめ、言葉で表現する。(思考・判断・表現)

（２）準備

- プリント
- 図像のコピー

（３）学習過程

時程	学習活動	指導上の留意点	評価
導入 （５分）	中世ヨーロッパとはどのような時代だったのか？ →キリスト教の時代 学問・建築など様々な分野と関係している。	ノート・教科書などを見るように促し、前回までの授業内容を思い出させる。	
展開 (30分)	① 学問とキリスト教 ●学問の歴史的展開を見ていく前に、キリスト教の聖典である聖書の世界をのぞき、人々の知的世界に触れてみよう。 →ヴェリスラフ聖書の図像と、日本語訳聖書の文章を照合し、図像が文章のどの場面を描いたものかを考える。	最初は一人で考えさせ、少し時間をおいて周りの人と相談する時間を設ける。 机間巡視を行い、必要に応じて助言等を行う。	自分なりに図像を読み解こうとしているか。(関心・意欲・態度)(技能)

	●修道院 中世初期においては修道院が教育の中心であった。 ●カロリング＝ルネサンス →ラテン語による文芸復興 ●スコラ学 →普遍論争 唯名論と実在論の対立があったことを理解し、自分ならどちらの立場を支持するか考えを書く。 ●12世紀ルネサンス →背景と、学問への影響を説明する ●大学の誕生 →教育の中心が大学に移る ●中世文学 →口語（俗語）で表現 騎士道物語に代表される 吟遊詩人の遍歴 ② 美術とキリスト教 中世の美術は、主に教会建築やその壁画に代表される。	聖書の文章に小文字が用いられている点を、図像を見せながら説明。 普遍論争について解説し、唯名論と実在論、自分ならどちらの立場に賛成か、考えさせる。 十字軍遠征によるイスラームや東方との交流を説明。 世界的によく知られている大学が中世に誕生したと知ることで、現在とのつながりを意識させたい。 ヴェリスラフ聖書の建築場面の絵を紹介し、当時の建築の様子をイメージさせる。 聖堂の写真を見せることで建築様式の特徴を理解させやすくする。	自分の考えを書くことができているか。（表現）
まとめ (15分)	ヴェリスラフ聖書と、ルネサンス期の絵画を比較し、気づいたこと、考えたことを書く。 中世ヨーロッパは、神・教会中心の世界だった。 →人間中心のルネサンスの時代へ。	描かれた時期が異なる同じ題材の絵画を比較することで、次の時代への移り変わりを意識させる。	絵画表現の違いを読み取ることができたか。（技能） 気づいたことをまとめることができたか。（表現）

参考文献

- P.ディンツェルバッハー／J.L.ホッグ編（朝倉文市監訳）『修道院文化史事典』八坂書房、2008年。
- ロバート・バートレット編（樺山紘一監訳）『図解ヨーロッパ中世文化誌百科上下』原書房、2008年。
- 堀越宏一・甚野尚志編『15のテーマで学ぶ中世ヨーロッパ史』ミネルヴァ書房、2013年。
- ルドー・J・R・ミリス（武内信一訳）『天使のような修道士たち―修道院と中世社会に対するその意味―』新評論、2001年。
- 八木雄二『神を哲学した中世―ヨーロッパ精神の源流』新潮社、2012年。